

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』における超現実のトポロジー ——『ナジャ』におけるトポスのジャック・ラカンの解読——

加 藤 彰 彦

(平成20年3月31日受理 最終原稿平成20年5月20日受理)

【要旨】

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』はブルトンがナジャを通して自己同一性を探求する小説として捉えられているが、その読解を踏まえつつも、シュルレアリスムの重要な概念である超現実を読み取るという場所論に基づいた読解を試みた。その際ジャック・ラカンの理論を援用したが、ラカンの言う想像界、象徴界、現実界といった区分に対応する形で、『ナジャ』の小説において、パリ市内、パリ市外、パリから遠く離れた不特定の場所というように物語の舞台が移行していることが明らかとなった。パリ市内においてブルトンとナジャの出会いがあり、パリから離れることによりブルトンとナジャの別れが確実になり、パリから遠く離れた地点においてナジャはまさに不在の存在としてブルトン自身とその小説を支えていることが理解される。パリ市内が舞台となっている場合には具体的な場所が明示されているが、物語の展開に伴って場所の提示が漠然とした大まかなものになり、最終的には具体的に明示されなくなる。この時点において物語の舞台となる場所とは、パリ市内でもパリ市外でもなく、まさにブルトンにとっての「心的現実」であり、これが超現実として捉え得ることを論証した。

【キーワード】

トポロジー、超現実、ジャック・ラカン、自己同一性、心的現実

序章

アンドレ・ブルトンによって書かれたシュルレアリスムの小説と言われる『ナジャ』は、多くの研究書・概説書によってブルトン自身の自己同一性を求める書であるとされている。確かに、1962年にブルトン自らが全面改訂した際に付け加えられた「序言」を除けば、『ナジャ』はまさに「私とは誰か」(PI p.647)¹という問いかけで始まり、『ナジャ』の本体をなすナジャの物語の最後も、「誰だ、そこにいるのは。あなたなのか、ナジャ。彼岸 (下線原文) が、全ての彼岸が現世にあるというのは本当なのか。私はあなたの言うことが聞こえない。誰だ、そこにいるのは。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)と締めくくられているのであるから、そのような読み方が成立するのは当然なのである。

また、冒頭部分の「私とは誰か」(PI p.647)に続いて書かれている「それというのも、全ては私が誰とくつきあっているかを知るのと同じことになるのではないかということなのである。この付き合いという言葉は、いくつかの存在と私との間に、私が考えていたよりも奇妙で、

避け難い、当惑させる関係を打ち立てようとする傾向を持つために、私を惑わせるということ
を認めなければならない。その言葉は意味するよりもはるかに多くのことを語っているし、私
の存命中に私に幽霊の役を演じさせ、もちろん私が誰か（下線原文）であるために、私が私で
あることをやめなければならなかったことをほめかすのである。」(PI p.647) は、既に指摘
されているように、アルチュール・ランボーの「私とは他者である」を想起させるし、ジャック・
ラカンの鏡像段階論によって説明し得るものである。私が私であるためには、もしくは私が誰
かわかるためには、私は自分自身ではなく、他者に同一化しなければならない。従って問題と
なるのは、私自身ではなく他者なのである。そのような関係において、私は私であることをや
めて、他者とならなければならないわけである。ところがこの関係を逆転させて考えてみるな
らば、外部にいる他者によって自分が誰であるかを教えられるということにもなる。

更に、『ナジャ』における自己同一性の問題は、半ば抽象的観念的議論に終始するものでは
なく、より現実的で具体的なものである。ブルトンがナジャと出会った1926年の10月4日
の2日後の10月6日、ブルトンとナジャとの間で次のような会話が交わされる。「ここじゃな
いわ…。でも、ねえ、何であんたが牢屋に行かなくちゃいけないの。あんたは何をしてしま
うことになるの。私も牢屋にいたわ。私は誰だったの。何世紀も前のことだわ。でもあんた、
あんたは誰だったの。」(PI p.697)

ブルトンの解釈は、「彼女は、マリー・アントワネットの取り巻きの中で、誰であり得たの
か自問している。」(PI p.697) ならば、ブルトン自身マリー・アントワネットの時代において、
ナジャと知り合っていたブルトンは一体誰であったのか。また時を現世に戻すならば、次のよ
うな記述が見られる。「私は、最初から最後の日まで、ナジャを自由な精霊、何らかの魔術の
行使が一時的に引き付けることを可能にするが、服従させることは問題になり得ないであろう
靈魂の一つのような何かと捉えていた。彼女はというと、その言葉の十全の意味において、私
を神と捉え、私が太陽であった（下線原文）ことを信じることもあったということを私は知っ
ている。」(PI p.714)

このような自己同一化の試みは果たして成功するであろうか。10月12日の記述において、ブ
ルトンは次のように書いている。「私は彼女の独り言に付いて行くことがだんだん苦痛になり、
そのため長い沈黙が私をしゃべれなくさせ始める。」(PI p.713)

そしてついに、ブルトンは次のように書くのだ。「私は、かなりずっと前から、ナジャと理
解し合うことをやめていた。実を言えば、恐らく私たちは、少なくとも存在している単純な物
事を眺めるような方法で、理解し合ったことは一度もなかったのだ。」(PI p.735)

ブルトンが求めていたこの試みは、明らかに失敗であったのだろうか。何ともすっきりしな
い中途半端な回想であるが、一方でブルトンは次のようにも書いているのだ。「ここにおいて
この死に物狂いの追跡が終わるということがあり得るのか。何の追跡か、私は知らないが、精
神的誘惑のあらゆる技巧をこのように実行するための追跡（下線原文）なのである。」(PI p.714)

ならばブルトンは一体何を求めていたのかということになるが、『ナジャ』の読解において
自己同一性を退けるのではなく、それとは異なった視点でもって『ナジャ』を捉えるのが、今

回の論考の目的である。それは、超現実とは何かというシュルレアリスムにとっては最重要とも思える問題にも繋がる場所論、つまりトポスの問題である。このような視点を得るに至ったのは、『ナジャ』における次の記述があるためである。ブルトンは『ナジャ』においていわゆるナジャの物語を始める前段階として、つまり『ナジャ』をナジャの物語を中心としてその前後にナジャの物語とは別個のものとして捉えられる記述を展開していて、そのことから『ナジャ』を三部構成として捉えることができるわけであるが、その第一部においてブルトン自身が体験した奇妙な、ある意味超現実的な出来事を語っていて、そこにおいてブルトンは最初に次のように書いているのである。「私は出発点として、私が1918年頃住んでいた、パンテオン広場の偉人ホテルを、そして休憩地として、1927年8月相変わらず同じように決然という、ヴァランジュヴィル-シュル-メールにあるアンゴの館をとるだろう。」(PI p.653)

1918年という年は、『ナジャ』の中では明確に詳しく記述されることはないが、ブルトンに影響を与えたアポリネールが死んだ年であり、ブルトンがアラゴンやスーポーたちとシュルレアリスムの活動を開始する時期と考えることができるだろう。また1927年は『ナジャ』の記述からも窺い知ることができるが、ナジャとの出会いが1926年であり、1927年の夏以降に、『ナジャ』が書かれているわけであるから、この年をもって『ナジャ』のそれなりの到達点と考えることは理解できる。むしろここで注目すべきは、場所の記述が明確にされていることであり、逆に言うなら、何故この場所なのかということも考えなければならない。このような場所論を視点として捉えることの補強材料として、ブルトンはナジャの物語を書き終えた後、つまり『ナジャ』においては第三部で次のように書いているのである。「私はこの物語が通じることになる場所のいくつかを見直すことから始めた。」(PI p.746)

何故場所なのか。我々はこちらにおいて、ブルトンにとって超現実が大きな問題であったことを想起し、それに注目しなければならない。我々は既にこの問題については論考を重ねてきたわけであるが²、重要な点だけをまとめておくならば、次のようなことが指摘できる。まず、ブルトンにとって超現実とは重要な概念であるにも拘らず、その定義らしきものはさほど明確ではなく、最も定義に近いものとしては、『シュルレアリスム宣言』の中の次の箇所が挙げられる。「私は、夢と現実という見かけは非常に相反したこれらの二つの状態の、一種の絶対的現実、つまりもしこのように言うことが可能ならば、超現実（下線原文）への未来の変化を信じている。」(PI p.319)

超現実の前には現実と夢というものが存在するわけであるから、超現実とはそれなりの時空間であることが諒解される。この場合、それが現実により近いものであるならば、超現実は何らかの場所として捉えられるであろうし、夢に近いものとして捉えられるならば、一種の心理状態であることが予想される。それは『シュルレアリスム第二宣言』において、次のように書かれているからである。「あらゆる点から見て、生と死、現実と想像、過去と未来、伝達可能と伝達不可能、上部と下部が矛盾して捉えられることを止める精神のある一点が存在すると考えざるを得ない。」(PI p.781)

そしてそれが仮に現実に近いものとして捉えられるならば、いかなる場所であるかについて、

ブルトンは『シュルレアリスム宣言』において次のように書いているのだ。「今日のところは私はある城（下線原文）のことを考えていて、その半分は必然的に崩壊しているというわけではない。この城は私のものであって、パリから遠くない田舎の風景の中にそれを見るのだ。人は私に詩的な嘘を認めさせるだろう。各人は私がフォンテーヌ通りに住んでいて、そして自分たちはこの水を飲まないだろうと繰り返して立ち去るだろう。当然のことだ！ しかし私が各人に礼を尽くしているこの城、これが心像だというのは確かなのか。それでも、もしこの宮殿が存在していたなら！ 私の客人たちはそれに応えるためにそこにいるのだ。彼らの気紛れはそこに至る光り輝く道である。我々がそこにいる時（下線原文）、我々は本当に気ままに暮らすのである。」（PI pp.321-322）

ブルトンにとってその城が実在するものであれ、単なるイメージにすぎないものであれ、それがブルトンの求める場所であることは明らかだろう。仮に実在するならば、まさにそれは現実であり、単なるイメージにすぎないのであれば、夢もしくは想像として捉えられるわけである。ここにおいて我々はブルトンにとっての超現実を見出す手掛かりを得ることができたわけである。この点を理解するのに、ラカンの考えは有効な示唆を与えてくれる。ラカンは『エクリ』の中の「カントとサド」において、次のように書いている。「サド的な幻想が他の場所よりもキリスト教的な倫理学の支柱の中によりうまく位置する場所を見つけるということが、我々の構造線を把握しやすくすることなのである。」（EII p.147）

ブルトンであれサドであれ、求めるものをどの場所に位置させるかによって、理解の度合いが大きく変わってくるのである。それが現実における何らかの場所であるか、観念的な枠組みの中であるかは、その求めるものがどの段階にあるかということに関わってくるだろう。ラカンは『エクリ』の中の「心的因果性について」³において、モリエールの『人間嫌い』に出てくるアルセストの台詞を引き合いに出しているが、自由になるためには、まずこの地上において人里離れた場所を求めなければならないとする考えが示されている。またラカンの鏡像段階においても、自分が自分であるためにはまさにこの現実中存在する他者を必要としているように、まずは現実における対応が求められているわけである。従って、我々はまず現実において実在した場所からこの考察を始めることにしよう。

第一章 パリ市内とく想像界＞

『ナジャ』を場所という視点から捉えてみた場合、そこには特徴とも言うべき現象が見られる。まずブルトンがナジャと出会った10月4日から日付を記した形で語られる物語においては、全てはパリ市内で起こったことなのである。ところが、ナジャとの関係が思わしくないようになった段階から、パリ郊外やパリから遠く離れた場所が示されることになる。そして最後になると、つまりナジャの存在が消えてしまった段階においては、ある場所が示されるが、明確な形ではなくなっている。構成上『ナジャ』を三部に分けて考えることができるのであるが、テキストの箇所として異同はあるものの、場所という視点で捉えた場合も、このように三つに分けて考えることができるわけである。『ナジャ』において「序言」を除いて考えるとして、ナジャ

の物語が始まるシュルレアリスム的な数々の挿話の部分はどうするかという問題があるが、これを含めても含めなくてもさほど問題はないように思われる。ここで記されている地名はパリ市内が中心であり、唯一の例外がナントであるが、ここはブルトンの出生地であり、ナジャの物語が始まる更に以前の事として考えることができる。このナジャの物語が始まる前段階において注目すべきは、既に指摘したように、『ナジャ』を場所の観点から捉え、出発点と到達点として明確に記していることである。その意味からメタの立場に立つものと考え、以下の考察において参考にはしながらも、その枠から除外することも可能である。ナジャの物語が終わるあたりについては、いささか微妙な点であるが、パリ市内ではなくパリ郊外が出現する。従ってこのあたりを境界線として考えて、次の段階に繋げて考えることができるだろう。テキストのp.744以降においては、ナジャの物語が終わり、一定の期間を置いた後に再びブルトンによって書き継がれた箇所であるが、ここにおいてはナジャを回想しながらも、そこに示されている場所はパリ郊外であり、更には南フランスにまで至るという事態になっている。そして最後がテキストとしては1ページにも満たない箇所であり、イタリック体で書かれている。以上のような枠組みを捉えた上で、我々はまずブルトンとナジャが会って展開される物語の舞台であるパリ市内に目を向けることにしよう。ブルトンはナジャの物語が始まる前段階において、「私は出発点として、私が1918年頃住んでいたパンテオン広場の偉人ホテルをとるだろう。」(PI p.653)と記しているが、ナジャの物語において我々が出発点として捉えるべきは、ブルトンの家があったフォンテーヌ通りである。この点については『ナジャ』においてブルトン自身明確に記していて、次のように書かれている。「私は双面劇場が復活し、再び消滅するのを見た。それは最早単面劇場でしかなかったし、相変わらずフォンテーヌ通りにあり、最早私の家からちょっと離れたところにあったにすぎないのである。」(PI p.748)

つまりブルトンは1918年頃に偉人ホテルに住んでいたとあるが、このホテルのあったパンテオン広場を離れたのは、マルグリット・ボネによると、1920年の7月頃である⁴。更に正確を期するために記しておく、ここで指摘されている双面劇場は1921年の2月15日に生まれ、所在地はフォンテーヌ通りの6番地であったが、ブルトンの住居はその42番地にあったのである⁵。ブルトンの活動範囲に関してはこの近辺と限定することはできないにしても、この辺りを中心に考えて差し支えないであろうと思われる。念のために指摘しておくならば、『ナジャ』の出発点となったパンテオン広場とはかなりの距離がある。また『ナジャ』のテキストにおいては言及されていないが、シュルレアリストの会合場所となっていたカフェ・シラノのあったブランシュ広場も少し離れたところにある。更に、シュルレアリストの研究本部のあったグルネル通り15番地もパリ市内とはいえ離れたところにある。従って『ナジャ』において問題となるパリ市内とは、ブルトンのシュルレアリストとしての仕事の領域から離れた個人的な活動の場と捉えることができるだろう。ブルトンはナジャの物語が始まる前段階の挿話の部分で、次のように書いている。「人はさしあたりパリ市内で私に会えること、午後の終わり頃、『マタン』誌の印刷所とストラスブール大通りの間のボンヌ・ヌヴェル大通りを私が行き来しているのを見ることなしに三日以上経つことはない」と確信できる。私は何故か知らないが、私の足が向く

のは、決まった目的もなく、漠然としたこのデータ、つまりあれ (?) (下線原文) が起こるだろうというのはそこなのということ以外に決め手になるものは何もなく、ほとんどいつも私が赴くのは確かにそこなのである。この素早い道のりでは、まさに私の知らない間に、私にとって空間におけるのでも時間におけるのでもなく、人を引きつける力の磁極を作り上げ得るものが何なのか私にはほとんどわからない。違うのだ。非常に美しくそして非常に無用なサン・ドニ門ですらない。そこ、すぐ近くで上映されているのを見た映画の8番目と最後の話の記憶でさえないのである。」(PI pp.661-663)

ちなみにこの『マタン』誌の雑誌社の建物はボワソニエール通りとフォブール-ボワソニエール通りの角にあったということであるが⁶、この辺りはブルトンの自宅から近い距離にあったわけである。またここにおいて注目すべきは、ブルトンがこの辺りにやって来るのは自宅から近いところにあるというのも一つの要因であろうが、仕事でも何か個人的な用件があるわけでもなく、およそ明確な目的も理由もないということである。そしてこの流れに沿う形で、ナジャの物語の始まりがある。「昨年(1929)の10月4日、全く何もすることがなくて、非常に気の滅入った日々のある午後の終わりに、私はそういう時を過ごす秘訣を持っているので、私はラファイエット通りにいたのだ。「ユマニテ」の書店のショーウィンドーの前で何分か立ち止まり、トロツキーの最新作を手に入れた後、目的もなく私はオペラ座の方向に私の来た道を進み続けていたのだ。」(PI p.683)

ちなみにこの「ユマニテ」書店はラファイエット通り120番地にあったということである。この辺りはブルトンの自宅からも近く、気晴らしの散策であったということも可能であるが、この後しばらくしてブルトンはナジャと出会うわけである。『ナジャ』のテキストにおいては、次のように書かれている。「私は、そこ、ある教会の前の、名前を忘れているのか知らないが、その十字路を渡ったばかりだった。突然、反対の方向からやって来て、私から多分まだ十歩くらいのところにいる時に、私は非常にみすばらしい身なりをした一人の若い女性を見るのだが、彼女もまた私を見る、もしくは私を見たのだ。」(PI p.683)

これを地図を頼りに正確に再現してみるならば、マルグリット・ボネの記述によると次のようになる。「ラファイエット通りを下っているブルトンと、マジヤンタ通りの方向にラファイエット通りを戻っているナジャとは、当時ラファイエット広場、現在では10区のフランツ・リスト広場と呼ばれる広場の大きな十字路でしか出会うことができなかった。その教会とはサン・ヴァンサン・ド・ポール教会である。」(PI p.1542)

つまりナジャとの出会いの場とは、自宅からも近く、日頃はその辺りの散策も怠らないという極めて日常的な空間であったわけである。その日常的な空間からブルトンの求めるものが得られた理由について我々は探っていく必要があるわけであるし、我々の論考の始まりの対象はまさにそこにあるわけである。ところでブルトンはナジャの物語が始まる前段階の挿話群の中で、次のように書いている。「しかし私にとって、精神の奥底、つまり夜になるとか再び明ける(ということは昼なのか)とかが最早問題にならない領域に本当に降りていくということは、その時以来キャバレーに取って代わられたフォンテーヌ通りの〈双面劇場〉に戻ることで

ある。」(PI pp.668-669)

マルグリット・ボネによると、当初「この名前の小屋は、1906年フォンテーヌ通り16番地で束の間存在したことがあったが、この劇場がどうにかこうにかやってこれたのはいつも同じ通りだったし、ブルトンがp.748で言及しているのもこの通りのことである。フォンテーヌ通り25番地で一時的に再開され、名前も仮面劇場であったが、同じ住所で、1935年2月に最初の名前で再び姿を見せた。」(PI p.1535)

ブルトンがこの劇場に固執することの原因は何か。それはこの劇場で上演されていた芝居にあると思われる。ブルトンはこの劇場で見たある芝居に言及する。「私が『狂女たち』に対して抱いた限りない称賛の気持ちを言うのをこれ以上遅らせることはないだろう、これは私が覚えておきたいと思う唯一の演劇作品（私の言う意味は、舞台のためだけに作られたということである）として残っているし、これからずっと存続するだろう。」(PI p.669)

ならばこの芝居それ自体にブルトンの求めるものがあるかということではなく、登場人物であるソランジュを演じた女優が問題となるのである。ブルトンはこの挿話の最後に、次のように書いているのだ。「私はただこのことだけを付け加えることになるだろう、その役は当時の最も素晴らしくそして恐らくは唯一人の（下線原文）女優によって受け持たれていたということであり、私は彼女がそれでも尚美しかった＜双面劇場＞の他のいくつかの芝居において彼女が演じるのを見たことがあるのだが、彼女については、恐らく私にとってとても恥ずかしいことではあるが、彼女がブランシュ・デュヴァルであると話されるのを私が聞いたことは最早なかったのである。」(PI p.673)

ここで話が終わるならば単なる女優賛美にすぎないのであるが、ナジャの物語において、つまり10月4日に初めてブルトンとナジャとが出会った時、ブルトンは次のように書いているのだ。「目から始めてしまったけれど、仕上げる時間がなかった人のように、奇妙な化粧をしているが、目の縁は金髪的女性にしてはひどく黒い。目の縁であって、まぶたでは全くない（このような輝かしさは、まぶたの下を入念に化粧用のペンシルで黒くするなら得られるし、それでしか得られない。この点に関しては、ソランジュの役で、ブランシュ・デュヴァルが非常に近くから見ても、全く化粧しているようには見えなかったということに注目しておくのは興味深い。）」(PI pp.683-685)

つまりここでナジャに結びつくわけである。『ナジャ』のテキストには写真なども挿入されているが、p.715にはナジャの目だけが写真として示されていて、この点についても注目すべきである。ラカンには対象aという概念があり、自己同一性の根拠として捉えることができそうでいながら、結局は捕らえることができないものであるものなのであるが、ラカンによれば対象aの代表的なものとしては乳房、糞便、声、視線の四つがあると言われている。ブルトンにとってはこの視線が対象aとして考えられるわけであるが、ブルトンのナジャの目に対する執着は明らかである。ブルトンがナジャと最初に出会った10月4日に、ナジャの目について次のように書いている。「私はこのような目をそれまで一度も見たことがなかったのだ。」(PI p.685)「私たちは北駅の近くのカフェのテラスで立ち止まる。私は彼女をもっとよく見つめる。これらの

目の中で非常に異常な何かが移ろうということが可能なのか。そこに、漠然と悲嘆の何かと同時に鮮やかに思い上がりの何かが映し出されて見えるのか。」(PI p.685)

ブルトンは次の日もナジャに会うことに決めるのであるが、それはパリ市内のブルトンがいつもいる場所である。つまり「私たちはラファイエット通りとフォブール-ボワソニエールの角にあるバーで翌日また会うことに同意する。」(PI pp.688-689)

そして10月5日にブルトンとナジャは再び出会うわけであるが、この時ブルトンはナジャがブルトンの著書を読みたいと言ったことから、『失われた足跡』と『シュルレアリスム宣言』を持って行くわけであるが、ナジャはその『失われた足跡』の中の詩を読みながら、感動している様子を示す。「2番目の四行詩の最後で、彼女の目は濡れて森の光景で一杯になる。彼女は森の近くを通る詩人を見ているが、遠くから彼女は彼の後を付いて行くことができるようだ。」(PI p.689)

この後ナジャは自分一人で話をする遊びを提案する。「ええっとね、私なんだけど、こんな風にして私が一人でいる時は自分に話しかけるし、いろんな種類の話をも自分に語って聞かせるの。それに下らない話だけじゃないわよ。まさに完璧にこんな風にして私は生きているの。」(PI p.690)

ブルトンはこれに対して、テキストにおいては注の形で次のように書く。「人はここにおいてシュルレアリスム的な熱望の極端な終着点、その最強の限界理念（下線原文）に触れるのではないか。」(PI p.690)

ここにおいて、シュルレアリストたるブルトンはナジャにラカンの言う鏡像段階の他者を見出したとすることができるだろう。つまり私とは誰かという問いかけをするブルトンにとって、自分が誰とつきあっているかが問題になるとすれば、それはまさにナジャであるということになるわけである。そしてそのような判断が可能となった時点で、次のような言葉が交されるわけである。「それで私のことなんだけど、これからはどうするの。どこに行くの。でも、ラファイエット通り、フォブール-ボワソニエールの方にゆっくりと降りて行くのが、私たちがいたまさにその場所に戻ることから始めるのがすごく簡単ね。」(PI p.690)

恐らくはナジャ自身の商売の都合があり、示されている場所とはナジャにとっての領域ということなのだろう。再び仕事に戻ると考えれば、このあたりの発言も理解できる。このような事情を考えれば、10月6日の出会いの状況もわかりやすい。つまり10月6日の記述は次のようになっているのだ。「あまりにぶらぶら歩きすぎなくてもいいように（下線原文）私がナジャと5時半に落ち合うはずである<ラ・ヌヴェル・フランス>に歩いて向かうつもりで、4時頃に出る。ちょっとした買物をしなければならないオペラ座まで、いくつかの大通りを回り道する時間が要るのだ。普段とは逆に、私はショセ-ダンタン通りの右の舗道に行くことを選ぶ。私がまさにすれ違おうとする最初の通行人たちの一人が、最初の日の格好をしたナジャなのである。彼女はあたかも私に会いたくなかったかのように前に進む。最初の日と同じように、私は彼女と行った道を引き返す。彼女はこの通りに来ていることを説明するのがうまくできないということがわかる、そこで更に長くなる質問を止めるために、彼女は私にオランダのキャン

ディーを探しに来ているのだと言う。何気なく、既に我々は引き返してしまっていて、我々は最初に目に付いたカフェに入る。」(PI pp.690-691)

マルグリット・ボネによれば、ブルトンとナジャが落ち合う予定になっていた<ラ・ヌヴェル・フランス>というカフェ・レストランについては、「その建物は今も存在していて、ラファイエット通り92番地とフォブール-ボワソニエール通り91番地の角を占めている。」(PI p.1543)つまりブルトンとナジャの生活空間が見事に重なり、そこにおいて出会い、お互いの時間を共有していると考えることができるわけである。しかしこれは、自宅が接近しているというわけではない。というのも10月6日の出会いの後、ナジャが家に帰ると言い出したことから、自宅の所在が明らかとなるためである。つまり「彼女は自分の家に帰るつもりだと言うので、私は送って行くと言う。彼女は運転手に芸術劇場の住所を教えるのだが、彼女が私に言うには、そこは彼女が住んでいる家からちょっと行ったところにあるのだ。」(PI p.693)

この芸術劇場はマルグリット・ボネによれば、「17区のシェロワ通り2番地の2にあって、現在はエベルト劇場となっている。」(PI p.1544)

ところがこの後ナジャはブルトンに対してお互いの結び付きの強さについて語るわけであるが、この時点から今までの場所からの移動が行なわれるのだ。同じパリ市内とはいえ、ブルトンの自宅近くの領域からは距離のある場所である。「私は一緒に夕食をとろうと提案する。ある種の思い違いが彼女の頭の中で生じたに違いなかった、というのも彼女は、彼女がそう信じているようにサン-ルイ島ではなく、ドフィーヌ広場に我々を連れて行かせているからである。(中略)(このドフィーヌ広場は確かに私の知る限り最も遠く人里離れた場所の一つであり、パリにある最悪の空地の一つである。私がそこに行くたびに、私は他の所に行きたいと思う気持ちを少しずつ失くしていくのを感じたし、非常に甘美で、あまりに心地よく執拗な、そして結局のところ打ちのめすような圧迫から逃れるために、自分自身を説得しなければならなかったのである。その上、私はこの広場に接する<シティ・ホテル>というホテルにしばらく住んだことがある。)」(PI pp.693-695)

ブルトンが暮らしたことのある「シティ・ホテル」は、マルグリット・ボネによれば、「1区、ドフィーヌ広場29番地」(PI p.1545)にあるのだが、現実を嫌悪し、ボードレールのようにここ以外のどこかの場所を志向すると思われるブルトンにとって注目すべき記述である。ところがそこにおいて、ナジャは予知能力を発揮、不吉なものを見てしまったがために、ブルトン同様恐怖に囚われることになる。そのため「私は今これらの場所を離れるべき時だと思う。河岸通りに沿って歩きながら、私は彼女が完全に震えているのを感じる。コンシエルジュリの方に戻りたがったのは彼女である。彼女は非常にくつろいでいて、私のことを非常に信頼している。しかしながら彼女は何かを探していて、彼女は、我々が中庭、彼女が素早く調べる取るに足らない警察署の中庭に入ることを、どうしてもしたいと言って聞かない。」(PI p.697)

ここにおいて序章で指摘したように、ナジャはマリー・アントワネットの時代においてナジャ自身とともにブルトンが誰であったのかを知ろうとしている。言わば前世において誰であったのかという問題であるが、この時点においてブルトンとナジャの結び付きというものは明確

である。しかしこれはあまりにも先走りした状態と言えるかもしれない。私とは誰かの回答を一挙に見ようとしているかのようにも思われるからだ。そのためか、「私は心配する、そして、彼女から手を一つ一つ引き離しながら、私は最後には私の後に付いて来るよう彼女に強いる。半時間以上がこうして過ぎ去った。橋を渡って、我々はルーヴル宮の方に向かう。(中略) 真夜中の12時頃、我々はチュイルリー公園に到着する。(中略) 庭園から出る時に、我々の足はサン・トノレ通りの、明かりを落としていなかったバーに向かう。」(PI pp.697-698)

このバーとは、マルグリット・ボネによれば、「サン・トノレ通り107番地にあった。」(PI p.1546) このように私とは誰かに対する答えに直面しなければならない事態に至って、日常生活に戻る必要性が生じたと思われるが、10月6日の最後において、「我々は明後日の夕方にしかく・ラ・ヌヴェル・フランスでまた会わないことに同意する。」(PI pp.698-701)

この点についてはラカンが言うように、回答を先送りすることによって欲望を維持し続けるという説明が可能だろう。つまり私とは誰かという問いを投げかけるブルトンにとって、それに対する回答は何としても知りたいところである。しかしむしろ重要であるのは、その回答よりはむしろ知りたいという欲望の方であって、それをいかに維持し持続させるかということに留意しなければならない。というのも仮に回答が得られるならば、欲望が消滅してしまうに違いないからである。欲望が消滅した状態において、人はいかに生きていくことができるかということである。従って、10月7日の次のような記述はむしろ当然の結果だと言わなければならないだろう。「私は激しい頭痛に苦しんだ、是非はともかく、あの晩の心の高ぶり、そしてまた私がしなければならなかった注意と適応の努力に原因があると思う。」(PI p.701)

しかし鏡像段階における他者であるナジャに会わなければブルトンはブルトンでなくなるわけであり、何としてもナジャに会わなければならない。ただし会う約束はしていないのだ。「私たちが既に出会ったバーに6時頃赴くのでないなら、私は何をすることができるのか。当然のことだが、そこで彼女を見つけるいかなる可能性もない、....しない限りは。しかしくしない限りは>というのは、可能性という以上に、ナジャの介入のたいなる見込みが存在するところではないか。私は3時頃妻と女友だちと一緒に出かける。タクシーの中で我々は昼食の間そうしていたように、彼女について話し合い続ける。突然、私は通行人にいかなる注意も払っていないのに、そこ、左の歩道の、サン・ジョルジュ通りに入るところで、何かわからないが素早い染みが、ほとんど機械的に私を窓ガラスにたたきつけさせる。それはナジャが通り過ぎたばかりであったかのようだ。私は彼女がとり得た三つの方向の一つを行き当たりばったりに走る。実際そこで立ち止まっていたのは、さっき彼女と一緒に歩いていたと私に思われる男性と話合っている彼女である。」(PI p.701)

現実的に考えてみるならば、これは単に偶然の為せる業というわけであるが、これに対してブルトンが「これで私が彼女と出会うのは二日続けてだ。彼女が私のなすがままであることは明らかである。」(PI p.702) と言っていることから、ブルトンが主体的になってきている、少なくともブルトン自身はそう思っているということが言えるだろう。つまり鏡像段階においてナジャが現われ、ブルトンはそのナジャの目の虜になる。ここにおいてブルトン自身は疎外さ

れるわけである。しかしナジャのブルトンに対する好意や、マリー・アントワネットの時代におけるお互いの関係を示唆されることによって、完全とは言わないまでもブルトンは求めている主体性を確立するところまでに至るわけである。ところがこのような関係はこれで確立されたというわけではない。ブルトンがナジャと思いのままに会えるということを言ったことに対して、ナジャの態度は否定的である。「そう言われると、彼女は非常にためらいを示す。」(PI p.702)

そして10月8日に至っては、ブルトンはナジャに会うことができない。「別に大したことも起こらずに過ぎた夕方頃、私はいつものバー（＜ア・ラ・ヌヴェル・フランス＞）に赴くが、そこでむなしくナジャを待つことになる。私はかつてないほど彼女の行方不明を危惧する。私の苦境を切り抜ける唯一の方策は、芸術劇場から遠くない、彼女の住んでいる所を見つけようと試みることだ。私はたやすくそこに辿り着く。それは私が出向くことになる3番目のホテルになる、シェロワ通りの劇場ホテルである。」(PI p.703)

ちなみにこの劇場ホテルはシェロワ通り5番地にあり⁷、既に指摘したように芸術劇場はシェロワ通り2番地の2である。このホテルにブルトンはナジャを訪ねて行ったわけであるが、ナジャには会えなかった。更に、翌日10月9日次のようなことが起こる。「ナジャは私の不在中に電話をしてきた。電話に出た者が、私の代わりにどのように彼女と連絡をとるか彼女に尋ねたところ、彼女は＜私はつかまえない＞と答えた。しかし、少し後に速達で、彼女は5時半にいつものバーに来よう私を誘う。私は実際そこで彼女と出会う。前日の彼女の不在は誤解に原因があったのだ。私たちは例外的に＜ラ・レジャンヌ＞で会う約束をしていて、それを忘れていたのは私なのだ。」(PI p.703)

この＜ラ・レジャンヌ＞という有名なカフェは、サン・トノレ通り161番地に1854年に建てられたが、数年前に消滅したということである⁸。このようにナジャとの関係において、ブルトンの思い通りに行くわけではない。ブルトンの主体化が一見成功したかに見えたが、ここでもまだヘーゲル風の主人と奴隷の戦いが展開されているというわけである。そして更に注目すべきは、ブルトンはナジャの家にわざわざ出かけて行ってもナジャに会うことはできないのに対して、またナジャ自身そのように発言しているように思われるのに対して、パリ市内の街中においては会うことが可能という状況である。この後ブルトンとナジャの関係がどのようなになるか、ブルトンにとって主体化は確立されるのかというところであるが、10月10日に至ってそれまでとは若干違った展開を見せる。10月10日、「我々はマラケ河岸のレストラン・ドラボルドで夕食をとっている。」(PI p.705) その後二人は散策をし、「ナジャは一直線にずっと遠くまで行くことに抵抗するので、我々はセヌ通りで曲がる。」(PI p.707)

この後実在する場所に関して特筆すべき箇所はないように思われるが、注目すべきはナジャの発言の中にブルトンが関心を抱く城が現われ、ナジャがブルトンに小説を書くよう勧めるところがあり、このあたりからブルトンとナジャの関係が別の展開を見せることが窺われる。テキストによれば、次のようになっている。「次に、突然、私の前に身を置いて、ほとんど私を停止させ、がらんとした城の中で、部屋から部屋へと、誰かを呼んでいるように、私を呼ぶこ

の異常なやり方で、＜アンドレ、アンドレ… あんたは私について小説を書くのよ。保証するわ。嫌とは言わないで。用心してね。全ては弱まり、全ては消滅する。私たちの中で何かが残らなければならないの… でもそれで事態が変わるわけじゃない。あんたは別の名前を持つのよ。」(PI pp.707-708)

これはラカンの言う想像界から象徴界への移行の段階と捉えることができるだろう。従って逆に言えば、このあたりからブルトンとナジャの関係の消滅、別れの時期が来ていることが予測されるわけである。実際10月11日の記述にはこのような箇所がある。「私は午後無駄に長く続いた対談の結果、機嫌が悪い。その上ナジャは遅れてやって来て、私は彼女から例外的なものを何も予期していない。我々は通りから通りへと、近くにはいるが、非常に離れて散歩する。」(PI p.710)

これではブルトンにとってナジャは鏡像段階における他者ではないと明らかにしているようなものである。そして日付を伴ってナジャとの出会いを書いている最終日になるわけであるが、10月12日の記述は最早その別れが決定的なものとなりつつある。「夕食後、パレ・ロワイヤルの庭園の周りで、彼女の夢は私が彼女にまだあるとは知らなかった神話の特徴を身に付けた。彼女は、非常に奇妙な幻想を与えるに至るまで、かなり巧みにメリュジューという人物を作り上げる。(中略)私は彼女の独り言に付いて行くことがだんだん苦痛になり、そのため長い沈黙が私をしゃべれなくさせ始める。気分転換として、私は我々がパリを離れることを提案する。」(PI pp.710-713)

ここで注目すべきは、ブルトンとナジャとの別れが決定的になっているということ、そしてナジャが神話的な姿になり、現実の存在というよりも何か象徴的な存在になりつつあるということ、そしてパリから離れていこうとすることであり、これらの事柄は全て関連し合っているということである。ブルトンがナジャと出会うことができるのはパリ市内の街中においてであり、その時のナジャは確かに奇妙な印象を与えることがあるだろうが、現実における生身の人間として存在しているわけである。もちろんナジャそのものをブルトンにとっての他者としてそのまま受け入れることはできないわけであるが、ナジャとの関わりにおいてブルトンの求めるシュルレアリスムを具現化した存在としてのイメージを持ち続けるわけである。このようなイメージを伴ってナジャとの関係を持つわけであるから、これこそラカンの言う想像界に他ならない。ここにおいて確立された自己同一性が存在するわけではなく、ブルトンとナジャとの関係がいささか安定感を欠くことに見られるように、ブルトンとナジャのどちらが主体性を持つかわからないような世界なのである。つまりブルトンにとってはナジャを通して、そしてナジャにとってはブルトンを通してしか、同一化を確認することができないわけである。そしてこの不安定な関係の先にあるものが象徴界であって、10月12日の記述においてはその兆しが見えているのである。特に10月12日の記述の最後の方で、パリを離れてしまった時点で、その傾向は明らかである。「サン-ラザール駅、サン-ジェルマン行き、しかし列車は我々の目の前で出発する。(中略)我々だけがこの車室の中で、彼女の全ての信頼、彼女の全ての注意、彼女の全ての希望が思い出された。ル・ヴェジネで降りようか。彼女は我々が森の中を少し散

策することを提案する。いいじゃないか。(中略) ル・ヴェジネでは、全ての明かりが消えていて、どんなドアも開けてもらうことが不可能である。森の中の放浪は最早あまり魅力的でもない。我々は次の列車を待たざるを得ない。その列車は1時頃我々をサン-ジェルマンで降ろしてくれるだろう。城の前を通りながら、ナジャはマダム・ド・シュヴルーズになった。」(PI pp.713-714)

ここにおいてナジャの欲望はブルトンの欲望となり、ブルトンはナジャの欲望に応えることをその欲望とするに至るのである。以上の考察において明らかになることは、パリ市内の街中において各人は自らの鏡像段階の他者を求めて街をさまよい歩くことになる。街中においては原則知らない者同士であり、その立場において対等である。そしてそこにおいてまず交わされるのが視線であり、ブルトンがナジャと最初に出会った時にも、視線の問題が取り上げられている。これはただ単にどちらが先に相手を見たかという問題ではなく、どちらが主体としての位置を占めるかという問題なのである。サルトルが『存在と無』において指摘しているように、視線を向けることによって相手を対象化することができるわけである。つまり、「それ故我々は他者の視線におけるとともにそれによる他者のこの突然の出現の意味を明確にすることができる。どうあっても、他者は我々に対して対象として与えられることはない。他者の対象化は他者の視線としての存在の崩壊となるだろう。更に、我々が見たところであるが、他者の視線は視線を明示する物体としての他者の目（下線原文）のまさに消滅である。他者は他者にとっての私の存在の視界に空虚に目標とされる対象ですらあり得ないだろう。他者の対象化は、我々が後で見ることになるのだが、私にとっての存在を他者に与えることによって、他者にとっての私の存在からまさしく私を解放する私の存在の防御なのである。」(EN p.327)

つまり「私」が他者の視線の対象となることから脱するためには、相手を視線の対象としなければならないのである。これはただ単に見る見られるというだけの関係を示すのではなく、自らの存在に関わる問題である。更にこのあたりの問題を、サルトルは次のように説明する。「もし我々が視線（下線原文）として他者を最初に発見するということから出発するなら、我々は所有（下線原文）の形で我々の捕らえにくい対他存在を感じるということを認めなければならない。私は他者によって所有されている。つまり他者の視線は赤裸々に私の身体を加工し、目に見える形にし、彫刻を施し、現在あるように提示し、私が決して見ることをないようにそれを見るのである。他者は秘密を保持する。それは私とはどういう存在であるかの秘密である。他者は私を存在させ、そしてまさにそのことによって私を所有し、そしてこの所有は私を所有しているという意識に他ならないわけである。そして私であるが、私の対象性を認めることにおいて、私は他者がこの意識を持っていることを感じるのである。意識として、他者は私にとって私から私の存在を盗んだものであると同時に、私の存在である存在を＜あるということ＞にしているものなのである。」(EN p.431)

しかしこのような関係は「私」から見た一方的な関係ではない。サルトルも指摘しているように、相互的な関係なのである。つまり「私にとって当てはまることは全て他者にとって当てはまる。私が他者の支配から私を解放しようと試みている間、他者は私のから自らを解放しよ

うと試みる。私が他者を服従させようと努める間、他者は私を服従させようと努める。」(EN p.431)

このような視線が交差する場として、パリ市内の街中が提示されるわけである。パリ市内の街中においてこそ、ブルトンは自己同一性を明らかにするための他者を探し求めることができるわけである。そしてナジャとはまさにこの街中にいる女性だったわけである。ブルトンはナジャとの別れが近付いているある時点において、本当のナジャとは一体誰であったのかという思いを巡らせるわけであるが、ここにおいてナジャの一つの姿として次のような表現をしているのである。つまり「街中、それは彼女にとって唯一の価値ある経験の場であって、街中は大きい妄想に導かれた全ての人間の問いかけが聞こえる所というわけであり、その街中にいることだけを好んでいた、いつも靈感を受け靈感を与えていた女性」(PI p.716)というわけである。

ここにおいて、自己同一性を明らかにするために鏡像段階における他者を求めるブルトンと、いかなる問いかけにも応じることのできるナジャとがパリ市内の街中において遭遇することは、むしろ必然的であったと言えるかもしれない。このように自己同一性を求めるという欲望を持つブルトンが、シュルレアリスムの具現化された存在というイメージとともにナジャとの関係を結ぶことで、この現実世界における居場所を確立しようとしたわけであり、ここにおいてパリ市内の街中として示される世界は、まさにラカンの言う想像界であるということが言えるのである。しかしここにおけるブルトンとナジャの関係は確立した固定的なものではなく、むしろ不安定なものであると言えるだろう。既に指摘したように、ブルトンにとってはナジャを他者として必要としているが、一方でナジャはブルトンを他者として必要としているわけであり、どちらがその主体化を獲得するかというせめぎ合いのような状態が続くわけである。もちろん合わせ鏡のようにお互いがお互いを鏡に映すことで、ブルトンとナジャが完全に融合してしまうような状態も考えられるわけであるし、ブルトン自身そのことを考えていたことも後において明らかとなるであろう。しかしブルトンがナジャを常に鏡像段階における他者として見なしていたわけでもないことも同時に起きていることなのである。例えば、10月11日の記述には次のようなものがある。「レストランの出入口の所で、彼女がメニューを読んだり、いくつかの料理の名前で遊んでいるのを見るのはいらいらしてくる。私はうんざりする。」(PI p.710)

10月5日の記述では、このようなナジャの言葉遊びを捉えて「シュルレアリスム的な熱望の極端な終着点」(PI p.690)と表現していたにも拘らずである。従って自己同一性のために鏡像段階における他者を求めるという欲望を持っているブルトンにとって、ナジャは最早確固たる存在ではないのである。そして最終的な段階において、ブルトンはナジャを理解することの困難を告白する。シュルレアリスムの化身というイメージを伴い、生身のナジャをこのパリ市内の街中という現実世界において捉えることの限界が明らかになったということが言えるわけである。そしてこのことは想像界の限界としても捉えることができるわけである。そもそも自分が自分であるためには自分であることを脱し、他者に自分自身の姿を探し求めてそれと同一化するあるいはむしろ他者になることによって初めて可能であるという、当初から矛盾を孕んだ試みをしなければならない。またその他者についても、ブルトンにとってナジャがシュルレ

アリスムの化身であるかの如く捉えられたというイメージ先行の関係において、そのイメージではなく生身のナジャに触れ、本当のナジャとは一体いかなる存在であるかを問題にしなければならなかった時に、明らかに崩壊することを決定付けられた関係となるのである。また自己同一性の獲得のために他者を対象化するという過程において、主客の逆転も既に指摘したように当然起こり得るものであるから、不安定な関係であることは本質的なものなのである。ここにおいてこれを乗り越えるべく、新たな領域が求められなければならない。もちろんだからといって、これまでの鏡像段階を通して他者を求めることが無駄であったとか不必要であったとかいうわけではない。これらは全て必要な段階であって、それを通してこそ次なる段階に進めるわけである。この段階において求められるべきものとは、主客関係において自らの主体性を奪い取らなければならないといういささか暴力的な状態を脱し、より安定したものと言えるわけであるし、当然の如く本質的に欠けたところのあるものをイメージでもって補うということではなく、確固たるものとして築かれていなければならないということである。このような世界こそラカンの言う象徴界であって、そこにあるものは絶対的な他者が支配する象徴的な秩序であり、我々は安心して自己の中に見出し得ないものを外部に求めていくことができるわけである。『ナジャ』においては、想像界から象徴界への移行のためにブルトンはパリ市内の街中を離れ、パリ市外の郊外更には南フランスへと向かわなければならないだろう。

第二章 パリ市外と＜象徴界＞

ブルトンとナジャとの関係がもうひとつ順調ではなくなりつつある時、ブルトンはパリを離れることを提案する。ブルトンは気を紛らわすことが目的であるとしているが、パリ市内の街中は様々な人が行き交う状況であるため、他の人ではなくまさにナジャとの関係を確立するためには多くの人がいらない所に行く必要があったわけである。この時点において、ブルトンは鏡像段階を依然として引きずっている。例えば、次のような事実が典型的である。「私がヴェルサイユからパリへの道を車で走らせていた晩、私の隣にいた女性、それはナジャだったけれど、他のあらゆる女性でも、そして他の誰か（下線原文）でさえあり得たのじゃないだろうか、彼女の足はアクセルの上に押し付けられた私の足を抑えていて、彼女の両手は私の目の上に置こうとしていて、果てしのない接吻がもたらす忘却の中で、彼女は我々が最早永遠に存在しなくなることを、お互いにとって、このように全速力で我々が美しい木々を迎えに行くことを望んでいたのである。」(PI p.748)

ここにおいて自己と他者、主体と客体という区別は最早存在しない、完全に融合した状態が出現する。鏡像段階を通り越した、まさに同一化ということである。もちろんこのような事態は実現しなかったし、あくまでイメージとして捉えるべきものである。この点について、ブルトンは先の箇所が続けてこのように説明する。「私がこの欲望を聞き入れなかったと付け加えても無駄である。私が当時どういう状態だったか、私の知る限りでは、私がナジャとほとんどいつもどういう状態でいたかは人が知っている。愛についての共通の認識がその時我々を何に関して拘束していたかを、ものすごく身にしみるやり方で、私に明らかにしてくれたことで彼

女に少なからず感謝している。いかなる場合においても（下線原文）私は自分がこのような誘惑にだんだん抵抗できなくなっていると感じる。この最後の思い出の中で、私にその必要性を理解させてくれた女性に、私は感謝することしかできないのだ。お互いに全てを期待し、全てを心配することのできる非常に稀なある人たちがいつも互いに誰であるかがわかるのは、挑戦の極限の能力においてなのである。少なくとも理想の上では、私はしばしば目隠しをして、前人未踏のこの車のハンドルを握っているのだ。」（PI p.748）

ブルトンは愛という言葉を使っているが、他者の欲望を自らの欲望とし、自他の区別のつかない同一化は、現実には不可能という意味において幻想である。鏡像段階において自らを確立するために、自分自身を捉え、本来自分があるべきところに他者を持ってくるわけであるから、何もわからない状態で他者にしがみつく場合を抜きにすれば、まさに受け入れ難い状態であるに違いない。しかしそれを幻想ではなく現実にするものがあるとすれば、ブルトンの言う愛を持ち出さなければならないだろうが、ブルトンもナジャとの体験で明らかにしているように、現実においては不可能なことである。ただしそれを観念的に捉え、イメージとして抱き続けることは可能であり、一時的でも欲望を満たしてくれるわけである。俗に愛は盲目と言うように、このイメージに対して自足的になれば、それ以上のことを知ろうともしないし、知りたくもないということになる。ここにおいて、ラカンの言う自我における認識の問題が生じる。イメージという幻想に支配されては、自我を捉えることができないということである。そもそも鏡像段階において自己同一性を見出し確立するために、自己を脱し他者を自己の居場所に据えることでそれを可能にしようとする。自己を確立したいという欲望は、他者を受け入れるために他者の欲望に応えようとし、他者の欲望こそが自己の欲望という風になる。この図式を基にしてナジャの欲望を捉えてみるならば、単なるイメージだけで自足できる状態ではないことが明らかである。ブルトンは次のように書いているのだ。「私がどんな欲望を持っていたにせよ、また恐らくはどんな幻想であったにせよ、私は彼女が私に提示していたものに対処する能力が恐らくはなかったのだ。しかし彼女は私に何を提示していたのか。そんなことは大したことではない。」（PI p.736）

最早ブルトンの欲望はナジャの欲望に同一化することではなくなっているが、このような過程においていかなる場所でブルトンがナジャをどのように捉えるに至っているかについて見ることにしよう。まず、ブルトンとナジャの関係がいささか思わしくなくなっている段階において、これは10月12日の出来事であるが、ブルトンとナジャがパリからル・ヴェジネに行くところがある。「ル・ヴェジネでは、全ての明かりは消えていて、どんなドアも開けてもらうことが不可能である。森の中の放浪は最早あまり魅力的でもない。我々は次の列車を待たざるを得ない。その列車は1時頃我々をサン-ジェルマンで降ろしてくれるだろう。城の前を通りながら、ナジャはマダム・ド・シュヴルーズになった。」（PI pp.713-714）

このマダム・ド・シュヴルーズは、マルグリット・ボネによれば、恋愛や政治の策略に満ちた人生で有名であって、彼女はフロンドの乱に参加したとのことである。若き王、摂政、そして宮廷は1649年1月5日にこのサン-ジェルマンの城に逃げ込んだのだ。従ってこのサン-ジェ

ルマンの城の前でマダム・ド・シュヴルーズになるということは、全くの偶然ということではない⁹。このようにナジャが別人になるというのは他にもあって、日付を伴って書かれた記述以降の部分であるが、「ナジャはまた幾度もメリュジーヌの姿で現われた、それは神話の人物の中で彼女が最も身近に自分を感じたように思われるものなのである。」(PI p.727)

この点に関連してマルグリット・ボネは分析を行なっていて、その指摘は次のようなものである。「ナジャの話題においては少なくない文化的指標が現われていて、それはまず神話的な指標である。ナジャはここにおいて、彼女が進んで自らを同一化させるお気に入りの神話上の人物であるメリュジーヌという人物を作り上げている。このメリュジーヌとは、中世の伝説がリュジニャン邸の創設者と見なした女性であるとともに蛇でもある妖精なのである。(中略)ナジャはしばしばセイレンとしても示される。ナジャはゴルゴンヌを思い起こさせるし、質問の形ではあるがメドゥーサを殺したペルセウスを思い起こさせる。パリに到着した際に泊まるホテルを決めたのも、スフィンクスという名前である。(中略)他の文化的な指標はあまり多くないということは指摘できるだろう。一つは文学的なものである。ナジャは、ニューブリテン島の仮面の中に再認する『ル・シッド』のヒロインであるシメーヌを参照させる。他の二つは歴史的なものである。マリー・アントワネットの側近への言及や、サン-ジェルマンの城におけるマダム・ド・シュヴルーズとの自己同一化という戯れである。」(PI pp.1550-1551)

ここにおいて明らかになることは、ナジャとは一体誰であるかという問いかけを待たずにナジャから示される象徴的な姿である。つまりその象徴的な名前によって示される人物は、神話的なものであれ文学的なものであれ、更には歴史的なものであれ、どのような人物であるかが明確になっているということである。ブルトンは自己同一性を探求するという欲望からナジャをその他者として捉えるわけであるが、一方ナジャの自己同一性の欲望の対象として既に指摘した象徴的な人物が現われるというわけである。ここにおいてブルトンとナジャとが融合するという鏡像的な段階から、ブルトンでもナジャでもない第三者を志向する象徴的な次元への移行が見られるわけである。ここでの象徴的人物とはたとえ実在した人物ではあっても、最早この現実中存在する人物ではない。従って現実においては不在の対象として差し出されたものである。このことによってブルトンはナジャを他者として捉える鏡像段階的な関係を解かれ、象徴的次元へと向かう他なくなるのである。これに伴う利点とは、ブルトンはナジャとの関係においていささか安定感に欠けることもあったわけであり、象徴的次元に移行することによってそれなりの安定を得ることができたわけである。そしてブルトンがナジャとの別れを決意し始めたあたりから、ナジャ自身も現実中存在する生身の人間ではなく象徴化されたものとなっていくのである。ここにおいて本論考の重要な視点である場所という点から確認を行なっておくと、ブルトンはナジャとの関係がいささか思わしくなくなり、気分転換と称してパリを離れ、ル・ヴェジネを経由して、サン-ジェルマンに赴く。そしてその城が問題となってくるのである。既に指摘したように、超現実とからめて城はブルトンにとって理想として求める場所であり、実在する城の中であってそれに言及するに至るわけである。「そこ、城の上の方にある右側の塔の中に部屋あって、恐らく人は我々をそこに行かせようとは考えないだろうし、我々

は恐らくうまく行けなかったわけで——そうしようとする理由もほとんどないわけだが——しかしナジャによれば、我々が例えばサン-ジェルマンで知っておく必要があったであろう全てということだ。」(PI p.716)

またブルトン自身この箇所に注を付けていて、「12世紀の初めに、レの森の中に、現在の城の起源であり、サン-ジェルマンという街の起源である王の城を建てさせたのがルイ6世である。」(PI p.716)

そしてこの中において様々な探索をすることが、ブルトンの求めることなのである。ブルトンはこれを一般化して次のように定義する。「人生とは暗号文のように、解読されることを求めるのかもしれない。」(PI p.716)

パリ市内から離れ、サン-ジェルマン、それもブルトンが求めていた城の中にやって来て、そこにおいて問題となるのが暗号のようなものというわけで、まさに象徴的次元なのである。ブルトンにしてみれば、シュルレアリスムの化身と考えることのできるナジャとの関係において、現実生身のナジャといくら関わってみたところで、何ら解決に至らないということを痛感するわけである。最終的には「私とは誰か」(PI p.647)という問いかけが「本当のナジャとは誰か」(PI p.716)という問いかけに変わっただけのことであり、改めて出発点に立ったという印象さえ与えるわけである。だからこそブルトンはナジャとの別れを問題にする時点において、次のように書くのだ。「ここにおいて私が、我々にしか関わっていないはずであると思え、結局のところ、あらゆるものの特徴を滑稽なほど説明していると主張した人があるように、あらゆる出来事の特徴を説明することを可能にしているある目的原因説に好意を抱くような気にさせている、いつもと異なる種類の事実、ナジャと私とが同時に証人だったり、我々のうちの一人だけが証人だった事実ということになるが、それらの事実の実例を何度も繰り返したとしても無駄だろう。私は日々の事情に通じていても、最早私の前で発せられたり、彼女によって私の目の前で一気に書かれないいくつかの言葉、私が彼女の声の調子を最もよく認め、そして私の中で響きが非常に大きくなっている言葉しか思い出したくはないのだ。」(PI p.719)

つまりここにおいて問題になっているのは、象徴的次元にあるまさに言葉なのである。これならばナジャが不在であっても、その言葉はブルトンにとっての所有となり、言葉の内にナジャ自身を捉えることができるようになるわけである。そもそも言葉とは指示物そのものではなく、それが近くなくても、あるいは不在であっても、それを指し示すことのできるものであって、不在を前提とした機能を持つものである。このように言葉を支配することによって、鏡像段階においては主体と他者との関係において自己の主体性を獲得するための戦いを展開しなければならなかったが、ナジャを捨て去ることも可能となったわけである。ナジャの物語において、ブルトンとナジャの関係はブルトンがナジャと別れることによって現実のナジャを失うという事態に至ったわけであるが、ブルトンはその代わりに言葉を獲得したわけである。しかしこのことは同時に自らも現実における主体的存在を失ってしまうことを意味する。これはラカンの言う主体の消滅であって、ブルトンはこのあたりの事情を次のように説明する。「人が与えるもの以上のものをその人から手に入れようと決して望むことなく、その人の人生で生きること

ができ、その人が動いたりじっとしていたり、しゃべったり黙ったり、夜更かししたり眠ったりするのを見るだけで充分満足であるという結果になるあらゆることは、私としては存在してもいなかったし、かつて存在したこともなかったのである。これは十分に確かだった。ナジャの世界であった世界、そしてそこでは全てが非常に素早く上昇と落下の外観を呈していた世界を考慮に入れると、ほとんど違った形ではあり得なかったのである。」(PI p.735)

このようにして鏡像段階において自己同一性のために求めなければならなかった他者という存在に代わって言葉を獲得することにより、主体はまた別の形でもって生き延びることになるのである。こういった主体の消滅もしくは喪失の体験は、主体の獲得において必要なものであり、主体と見られる場所には何もない、空無であるという事実を認識し、その上でその空虚を埋めていくことにより何らかの形で主体を取り戻すという手順を踏まなければならないわけである。ナジャとの関係においてブルトンを支えていたものが愛であったとすれば、ナジャを失ってから後ブルトンを支えていたものとは希望であると理解されるのもこうした理由からである。ブルトンはナジャとの物語の後に、次のように書いているのだ。「中断の日付である8月末から、今回は精神というよりも気持ちに関係している感情の重みに折り曲げられて、この物語が、敏感になっているのはいいとしても、私から離れる12月末に至るまで、私はどうかこうにか——人が生き得るように——この物語が守っていた最良の希望と、信じたい人は私を信じるだろうが、これらの希望のまさに実現、全面的な実現、そう、ありそうもない実現で生きたのだと私は考える方がいいのである。そんなわけで使い果たされている声は依然として人間的にわき起こり得るように私には思われるし、そんなわけで私がそこに書きたいいくつかの稀な調べを破棄することはないのだ。ナジャ、ナジャという人物は非常に遠くにいるのに…。他の何人かの女性と同様に。そして不可思議、この本の最初のページから最後のページまで私の信頼が少なくとも変わらなかった不可思議によってもたらされ、あり得ないことではない、既に取り戻され、最早彼女のものではない名前が私の耳に鳴り響かんことを。」(PI p.746)

鏡像段階における他者としてナジャを捉えていたブルトンであったが、ナジャと別れた後にもナジャという名前によってブルトンは希望を持って生きることができたわけである。もちろんそれは自己同一性を求めるブルトンにとって有効な手段を見出したか、見出す可能性を得たことを意味するであろう。そしてそれはまさにこの『ナジャ』という小説を書くことなのではないかと思われるのだ。この名前については10月10日においてナジャの予知として示されている。「アンドレ、アンドレ… あんたは私について小説を書くのよ。保証するわ。嫌とは言わないで。用心してね。全ては弱まり、全ては消滅する。私たちの中で何かが残らなければならぬ…。でも、それで事態が変わるわけじゃない。あんたは別の名前を持つよ。どんな名前か、あんたに言ってあげるわ、それはとても大事なのよ。」(PI pp.707-708)

小説を書くために我々は言葉を使用しなければならないが、いかに独自の文体を有していようとも、それが小説として機能し得るためには、自分のものではない言葉を他者によって構成されている社会から与えられ、その支配下に身を委ねることによって言葉を習得し、それを駆使できるに至るわけであって、言葉によって成立させられるこのような象徴的次元こそ、ブル

トンが想像界の次の段階として移行しなければならなかった象徴界なのである。従ってナジャと出会い、そしてナジャと別れることによって鏡像段階における他者を失ったかに見えるブルトンが次にナジャを小説に書くことは、自己同一性を求めるブルトンにとってはむしろ必然的であり、このような段階を踏まなければならなかったわけである。しかしブルトンはこの小説を書くことで自己同一性を明らかにし得たであろうか。この『ナジャ』として生まれることになる小説には、何が明らかにされていると言えるであろうか。ここにおいて我々はラカンの言うシニフィアンを想起するに至るわけである。ラカンは『エクリ』の中にある「＜盗まれた手紙＞についてのゼミナール」において、盗まれた手紙をシニフィアンとしてその存在の重要性を指摘している。ここで問題になっている小説とは、エドガー・アラン・ポーの短編小説『盗まれた手紙』である。手紙とは書いた本人の意思が宛名の人物に届けられ読まれることを本来の機能としているわけであるが、この小説においてその内容は全く明らかにされていない。王妃宛ての手紙であって、それが王に知られるとまずいということから大よそのことは推測できるわけであるが、それでもあくまで推測にすぎず、手紙は本来の機能とは全く別の働きをするわけである。小説の流れとしては、宰相が寝室から王妃の手紙を大胆にも盗み出すのであるが、王妃はその手紙を取り戻すために警察に依頼するがうまくいかず、そこで名探偵デュバンが登場し、手紙を見つけ出すわけである。ここで問題になっているのは、手紙がいかにも隠してあることを消して無造作に置かれている点にある。つまり隠されるべき手紙が隠されるのではなく、全く別のシニフィアンとして機能しているのである。そのためそれが目の前に置かれていても、探し求めている手紙であると認識できないのである。そしてこの手紙を巡り王、王妃、宰相、警察、名探偵がそれぞれの役割を果たすわけであるが、手紙の内容については一切明らかにされないままである。仮に手紙には何も書かれていない白紙であったとしても、事態は同様に展開するであろう。この小説の最後において名探偵は盗まれた手紙を元に戻すことでその役割を果たすわけであるが、この名探偵の役割は盗まれた手紙を元に戻すということよりも、手紙の内容を明らかにする事態を回避することができたということにあるかもしれないのである。盗まれた手紙が戻ることによって何事もなかったかのように事態は進行し、日常性も取り戻すわけであるが、手紙の内容については最後までわからないままであったのだ。ラカンの言うシニフィアンの優位は、逆にシニフィエという意味を明らかにしないことの意義に繋がるわけである。従って手紙の内容は明らかにされてはならなかったのである。むしろ我々が問題にすべきは、手紙というシニフィアンの方なのである。それとどう取り組むか、どう関わるかという問題である。このように考えるならば、『ナジャ』において「私とは誰か」という問いかけをしたブルトンが、その自己同一性のために求めたナジャとの関係がうまく行かず、結局は別れなければならなくなったという事態、そしてそのことを通してブルトンの自己同一性は依然として宙吊りにされた状態であり、問いかけを繰り返すに終始していることも理解されるだろう。つまり「私とは誰か」と問いかけるブルトンにとって、私とは誰かは明らかにされてはならず、むしろ求められるべきは小説というものが書かれることにあったのである。そのためブルトンがナジャの物語を書き終えた段階において、自己同一性の探求においては失敗であっ

たとしても、とりあえずは小説を書くということには成功した複雑な事情を次の記述において読み取ることができるだろう。それは『ナジャ』の構成上、ナジャの物語の後に書かれたものであり、執筆段階での事情を明らかにするならば、ナジャの物語の後一定の期間を置いて書かれたものである。「私は羨ましい（これは一つの言い方だ）、本のような何かを準備する時間があって、それをやり遂げた時に、そのものの運命や、結局のところそのものがその人にもたらず運命に興味を持つ方法を見つける全ての人が羨ましい。途中で、少なくとも一度それを諦める本当の機会がその人に生じたと私に信じさせてくれないものか。彼は更に先に進んだだろうし、彼が我々にその理由を言って下さることを人は期待できるだろう。私が長時間にわたって着手したいという気持ちであり得ているということから、私が愛しているような人生、そして現在そうになっている人生、つまり息が切れる程の（下線原文）人生に私はふさわしくないと必要以上に確信しているのだ。」（PI p.744）

これは欲望と欲動の問題としても捉えられるだろう。この点については後において詳述する予定であるが、自己同一性を探求したいとする欲望と、書き続けたいとする欲動において、書き続けるためには自己同一性を探求する欲望はむしろどうでもいいという形になっているという図式である。つまり自己同一性が明らかになれば、そこで欲望は満たされると同時に、それまで自己同一性を探求したいということで機能していた欲望が消え去る恐れがあるということから、その欲望の継続のために敢えて失敗を予定しておくとは言わないまでも、その成功を先延ばしにすることも当然考えられるわけである。失敗することを運命付けられたナジャとの関係において終止符を打ち、そしてナジャではない別の女性との関係を成立し維持させることのないよう、ブルトンは他者との出会いの場であるパリ市内を離れなければならないわけである。このことがナジャの物語が始まる前段階においてブルトンが到達点として示しているアンゴの館の存在を明らかにする。「そのアンゴの館は、私が邪魔されたくない時に、森のはずれで、人工的に茂みで隠された小屋の中にいるよう人が私に提案してくれた所で、そこから、その一方で私の好きなように仕事をしながら、シマフクロウを追いか求めたりできるのである。（私が『ナジャ』を書きたいと思っていたからには、他のやり方があり得ただろうか。）」（PI p.653）

ここで注目すべきはこの論考における主題である場所なのであるが、その前に時間について言及しておかなければならない。つまりこの記述においてブルトンは『ナジャ』を書くために1927年の夏にアンゴの館にいるわけであるが、それを「相変わらず同じように決然と」（PI p.653）と記している点に注目しなければならないのである。ナジャの物語が始まる冒頭の部分には「昨年の10月4日」（PI p.683）とあり、そこには注として「その年は1926年である。（著者の注、1962年）」（PI p.683）となっている。つまりブルトンがナジャと出会ったのが1926年10月4日のことであり、ブルトンが『ナジャ』を執筆するのが1927年の夏ということになる。『ナジャ』のテキストにおいて日付が見て取れるものとしては、「1926年11月18日付けのデッサン」（PI p.721）というのが最終である。もっともマルグリット・ボネの研究によると、ナジャからブルトンへの12月11日付け、12月23日付けの手紙（PI p.1550）も存在するわけであるから、テキストに示されている11月18日をもって最終とすることはできないだろう。いずれにしても、

このあたりから1927年の夏までには半年以上の期間があるわけであり、この期間が問題となるのである。ナジャとの別れの直後から執筆に取りかかり、1927年の夏に『ナジャ』を完成させたというわけではなく、この夏から執筆されているわけである。もっともブルトン自身ナジャの物語以後の、『ナジャ』の構成上第三部で明らかにしているように、ナジャの物語以降の部分はナジャの物語を書き終えた1927年8月の末から12月末まで中断されていたということを明らかにしているのであるが、ここではそれを問題にしているわけではない。むしろナジャの物語を書き始めるにあたって、ブルトンには時間が必要だったわけであり、そしてそれはパリ市内から遠く離れたノルマンディー地方にあるブルトンの隠れ家であったアンゴの館にすることが必要だったわけである。小説を執筆するために人の多い都会ではなく、静かな場所が必要であったというわけではないのだ。パリ市内にいれば、ブルトンはナジャから離れることはできなかったのである。ブルトンはナジャと別れようと思いつながらも、なかなかそれを実行するには至らなかったことを次のように書いている。「既に言ったことだが、私にどんなに細かいことでもいちいち言わないのではなく、彼女の生活の最も情けない波乱含みの展開を私に話して聞かせたり、場違いな媚態をあちこちでふるまったり、他の営業に寄って行きたいということで、かなり眉をひそめている私を待たせたりすることに対して彼女が申し訳なく思うことはなかった、というのも彼女が自然に（下線原文）なるのはもちろん問題外だったからだ。そのことにはもう固執しないが、彼女の価値観に彼女を戻すことを諦め、翌日彼女にまた会うことになるかもしれないが、何度私はほとんど逃げ出してしまったことか。」(PI p.735)

もっともこの時期にはナジャ自身精神に異常をきたし、パリを離れなければならなくなるという事態が生じているわけで、ブルトンがパリにいたとしても同様の結果となっているかもしれないわけであるが、現実の問題としてブルトンがパリを離れることによってナジャを不在の存在とすることができたわけである。もちろんこのことによってブルトンがナジャを忘れてしまうということになるわけではないが、不在のナジャという空白を埋めるためにもブルトンは言葉を必要としたわけであり、小説を書かなければならなかったわけである。言葉の世界とは本来あるべきものがなくても、その代わりに意味を指し示すことができるものとして成立している世界であり、ブルトンにとって自らの自己同一性を求めるために必要とした他者であるナジャを、想像的な鏡像段階において捉えたかに見えたが、それを失うことによって自己同一性も失うという根源的な喪失の体験として引き受けることが、ラカンも主張しているように必要だったわけである。ラカンによれば、このような喪失の体験を経ることによって、想像的な鏡像段階から象徴的な言葉の世界へ移行することができるわけである。ここにおいて、予め失われた存在を言葉の世界で追い求めるという欲望を発揮するわけである。その意味で、現実の世界で鏡像段階における他者に出会うのではなく、むしろその他者を不在として自分一人の世界を現実においても可能にすることが、まず必要となってくるわけである。パリ市内の街中にいれば、ナジャではなくてもナジャの代わりとなる他者に出会うことも可能であり、そのことは『ナジャ』のテキストの中においても示唆されていたことである。そのためにもブルトンはパリを離れノルマンディー地方の隠れ家に「決然と」立て籠もることになるわけであるが、この

隠れ家こそはブルトン自身が求める城に似通った存在であり、そこにおいて一人象徴的世界に戯れるということになるわけである。超現実といういささか観念的な概念が実際にはどのような世界を意味するかが窺えるだろう¹⁰。

第三章 Xと＜現実界＞

我々が『ナジャ』を場所論という観点から論考を進めていくことを可能にした根拠の一つであるが、ブルトンはナジャの物語の後、場所という視点からこの物語を見直すことにするのだ。ところがブルトンの目からすれば、パリは以前に見たパリとはどこか違っているのである。「陰気な柵に囲まれたベック、警戒体制にある近代劇場の方針、フランスのどこかの街と同じように人気のない期待はずれのプールヴィル、『蛸の抱擁』に関係するほとんど全ての事柄の消滅、そしてとりわけ、この本の中で別に問題にもなっていなかったけれども、私は何よりも固執していたのだが、グレヴァン蠟人形館で靴下留めをつけるために暗がりには逃げる振りをしているこの女性であり、いつもの姿勢で、私の知る限り旦（下線原文）、挑発のまさに目を持っている唯一の彫像であるとても可愛いおとりを写真に撮る許可を得ることができなかったということである。」（PI pp.746-748）

ここにおいて同じもののようでありながら、実際のところは何かしら変わってしまったものとは、まさにラカンの言う対象aなのである。ラカンはこのことについて自らの体験談を明らかにして、若い頃ブルターニュの海岸で小舟に乗っていたところ、波間に光を受けて眩しく光る一個の缶を見ていたら、同乗していた漁師が缶の方はあんたを見ているわけではないと言ったのに対して、後にそれでも缶は自分を見ていたのだと述べている。つまり我々は何か物を見ているつもりでも、実はその物によって見させられているということがあるわけであり、これこそがラカンの言う対象aなのである。従ってここにおいて我々は最早主体ではなく、その物の方に主体性があるのである。このように考えるならば、『ナジャ』においてブルトンがパリの街のことを語っているようでありながら、実はパリに語らされていたということが言えるだろう。ナジャの物語が生まれるパリとは、ブルトンが生かされている場所であったのだ。この意味において『ナジャ』の主人公とは、ナジャでもブルトンでもなく、パリという街であったとすることも決して間違いではないのだ。ところがこのパリから、ブルトンにとって対象aとしての何かを失ったとすればどうだろう。それは、ナジャの物語の後にブルトンがパリのいくつかの場所を見直した時に実際に起こったことなのである。このような事態に対して、ブルトンの反応は次のようなものである。「ボンヌ-ヌヴェル大通りは、映画館の正面入口が塗り替えられ、私にとってはサン-ドニ門が閉まってしまったばかりであるかのように、その時以来動かなくなった一方で、私は双面劇場が復活し再び消滅するのを見た。それは最早単面劇場でしかなかったし、相変わらずフォンテーヌ通りにあり、最早私の家からちょっと離れた所にあったにすぎないのである。他もそうだ。（中略）外の世界については、この退屈極まる話というのは、こんな風な事情ではないか。こんな風に時間は、犬を追い出すことのない時間は過ぎていく。」（PI p.748）

ブルトンがパリを離れようとしたのは、まずナジャとの関係を確固たるものにするため、そして終いにはナジャの不在に対応するためであった。ナジャという存在がブルトンの自己同一性を確固たるものにするためには不安定であったためであるが、ブルトンとナジャの出会いの場であったパリ市内の街中も、その意味では変わりゆく存在であり、確固たる絶対不変の場ではなかったのである。ブルトンがパリ市内を離れ郊外へと、更にはパリから遠く離れた場所へと向かって行ったように、ブルトンが求める場所は広がりを見せるのである。実際ブルトンはパリのいくつかの場所が変化したことを受けて、次のように書いているのだ。「＜街の外形＞について、空気が生活において存在するために流れているように私の思考においてそのようなものである要素の力によって私が住んでいる街から切り離され抽出された真の街についてさえ、どうなっているか思い巡らすことになるのは私ではない。いかなる名残惜しさもなく、今私はそれが別のものになり逃げていくのさえ見ている。それは知らぬ間に移行し、燃えて、バリケードのやたらに生い茂った雑草のそよぎの中で、男と女が一樣に愛し合い続けるであろう各部屋のカーテンの夢の中で、消え失せるのだ。この精神的な風景の限界は私をがっかりさせるし、アヴィニョンの方へのその驚くべき延長にも拘らず、私はこの精神的風景を下絵の状態で放っておくのだ。アヴィニョンでは教皇庁は冬の晩やどしゃぶりの雨に被害を受けなかったし、古くからある橋はついには子供向けの歌に姿を変えたとし、見事な裏切ることのない手がまだそれ程前ではない頃に＜夜明け＞という言葉が書いてある空色の巨大な案内表示板を私に指し示したのである。有限（下線原文）のまさに真ん中に私が星印を打ち込むのに役立つこの延長、そして他のあらゆる方向への延長にも拘らずである。」（PI p.749）

ブルトンが『ナジャ』を書く上において到達点としたアンゴの館はノルマンディー地方にあったわけであるが、ここにおいてブルトンは明らかに南フランスに向かっている。この点について、マルグリット・ボネは次のように説明している。ちょうど『ナジャ』がブルトンによって書かれていたあたりの時期であるが、ブルトンをはじめとするシュルレアリストたちはカフェ・シラノでシュルレアリストの会合をしていた。ちょうど1927年の秋のことであるが、エマニュエル・ベルルがシュザンヌ・ミュザールを連れてやって来ていた。このエマニュエル・ベルルという人物は作家であり、ジャーナリストであり、1932年から1937年まではガストン・ガリマールによって創設された『マリアンヌ』という政治的文化的週刊誌の編集長をしていて、1920年の1月6日にはマリー-アントワネット・ボルデスと、1928年12月1日にはシュザンヌ・ミュザールと立て続けに結婚していたのである。カフェで出会ったブルトンとシュザンヌは互いに引かれ合って、南フランスに向けてパリを離れたのである。彼らは1927年11月20日にはアヴィニョンにあるヨーロッパ・ホテル、そして25日にはトゥーロンにいたのである。ところが経済的な困難から、12月半ばにはパリに戻り、シュザンヌはベルルとよりを戻している。この12月の終わりにはブルトンは『ナジャ』の最後のところを書いているわけであるから、ちょうどこの頃のことである¹¹。つまりここにあるものは、想像界から象徴界へと進んできた次の段階でも何でもなくて、また他者を変えての繰り返しにすぎない。ナジャという女性がシュザンヌという女性に変わっただけの話なのである。このあたりのことは名前は明らかにされていないが、『ナ

ジャ』のテキストの中には現われていて、これは「君」という呼びかけによって示されている。「私が君のことをほとんど知らなかった時、私もまた君（下線原文）に語りたという欲望に従ったのがこの話なのである。」（PI p.751）とあるが、この話とは自己同一性にかからんだドゥレイ氏の話であって、まさに「私とは誰か」に始まるナジャの物語の再現である。また「私の話を聞いている全ての人々にとって、観念的な存在ではなく一人の女性であるはずの君、君がシメールであるということ君の中で私に強い印象を与えたと与えている全てのことに拘らず、一人の女性でしかない君」（PI p.751）と書かれているが、シメールこそナジャの象徴的存在の一つであったはずである。シュザンヌはナジャに取って代わる女性であるが、そしてこのような繰り返しは原理的には終わりのないものであるが、当時のブルトンにとってはシュザンヌが唯一の女性として捉えられている。つまり「故意にそうするのではなく、君は私の予感した様々な顔と同様に、私にとって最も慣れ親しんだ体つきに取って代わった。ナジャはこのような顔に属していたが、君が私から彼女を覆い隠してしまったのは完璧である。／私が知っていることは、この人物の置き換えが君のところで止まるということだけである。何故なら何も君に置き換わり得ないからであるし、私にとってこの謎の連続が終わるはずであったのはるか昔から君の前でだったからである。」（PI pp.751-752）

もちろんこれはブルトンによるシュザンヌへの意思表示であり、そのまま受け取ることはできないにせよ、この時点において唯一の女性とはナジャではなくシュザンヌであり、当時のブルトンにとってそれが真実であると考えられる以上、我々が向かうべきは、この時点においてブルトンはいかなる場所を提示してくるかという問題である。ブルトンはシュザンヌへの愛を明らかにした上で、唐突とも言える調子で「このことから必然的にある態度が美に関して生じる。」（PI p.752）と書くのだ。そしてその説明とも言える箇所において場所に関する記述を探し求めるならば、次のように書かれている箇所がある。「美はリヨン（下線原文）の駅で休みなく跳び上がっている列車のようなものであるし、私はそれが決してそこから出発しないだろうということ、出発しなかったということを知っている。」（PI p.753）

ここにおいて我々は何故リヨンなのか、何故列車が出てくるのか戸惑うことになる。マルグリット・ボネの研究によると、次のようなことが指摘されている。ブルトンとシュザンヌがアヴィニョンなどの南フランスに滞在した後、経済的な理由からパリに戻ってきたわけであるが、エマニュエル・ベルルは彼女をブルトンから引き離すためにコルシカ島に連れて行ったのだ。この時ブルトンは出発するということを知らされて慌ててリヨン駅に駆けつけたが、彼女を引き止めることができなかったわけである。こういうわけで列車は現実には駅を離れてしまったのであるが、ブルトンの夢の中では列車は出発していなかったわけで、それはこの愛に対する全面的な信頼に支えられていたからだということなのである¹²。ここにおいて、ブルトンにとって位置すべき場所というものが変化してきていることを見て取れるのである。確かに現実のブルトンはパリ市内にいたり南フランスにいたりということは実際問題としてあるが、それとは別に本来いるべき場所というものが現実とは別の所に示されているように思えるということである。例えばこのリヨンの件にしても、ブルトンがブルトンであり続けることができるのは、

まさにブルトンの夢においてなのである。夢は現実と対比して実体的存在ではないということから否定的に語られるわけではなく、夢もまたもう一つの現実であって、日常的に我々が生活しているこの現実とどこかで通底しているということから、夢の中で起きたことはいずれこの現実に影響を与えるはずであるし、左右する力も持っているはずなのである。このような考えが出てくる背景にはブルトンの無意識に対する信頼というものが存在するからであって、事実ブルトンは『ナジャ』のテキストにおいて街の広がり、南フランスへの志向を語った直後に、次のように書いているのだ。「私の唯一確かな行為だけを私に生じさせる鮮やかで響きの良い偉大なる無意識が私である全てを永久に意のままにせんことを。ここにおいて改めて私が無意識に与えているものをそれから取り戻すあらゆる機会を理由もなく自ら奪うのだ。私はもう一度無意識しか認めたくはないのだし、私の目の中にあることを私が知っていて、夜の包みにぶつかるのを私に免れさせてくれる光る点を私自身じっと見つめながら、無意識だけを当てにして、広大な防波堤をほとんど心ゆくまで踏破したいのだ。」(PI p.749)

ここにおいてブルトンにとっての位置すべき場所が現実のどこかというのではなく、フロイトの言う「心的現実」といった領域へと移行していることが見て取れるだろう。このように考えるならば、『ナジャ』のテキストのほぼ終了部分において全文イタリック体で書かれている箇所も理解できるに違いない。「朝の新聞は私に私の消息を知らせるのに常に十分であるだろう。＜X...、12月26日。サーブル島にある無線基地に詰めているオペレーターが日曜の晩これこれの時間に某所から発せられたであろう伝言の断片を捕らえた。(中略)伝言は625メートルの波長で伝えられていた。一方、受信の強さから考えて、オペレーターはサン・ルイ島から半径80キロメートルの範囲内で飛行機の位置を突き止めることができると思った＞。」(PI p.753)

マルグリット・ボネによると、これは当時の飛行機の遭難事故の記事から抜き取ったものである。1927年の暮れ、当時のアメリカのウィルソン大統領の姪と三人の乗組員が乗った飛行機が、ニューファンドランドから大西洋横断を試みるはずであった。12月23日にニューヨークを出発したが、ニューファンドランドには到着しなかったのである。12月24日から30日までの新聞の一面は飛行機の情報について伝えていたのだが、ブルトンが抜き取ったものは12月27日の『ル・ジュルナル』からである。ただし地理的な点は省かれていて、唯一の例外はブルトンが価値を置いている島の名前である。つまりそれはル・サーブル(砂)であって、「(手で掴んでもすぐこぼれ落ちてしまう)喪失のまさに物質、砂漠の果てしない砂、人がはまり込んで動けなくなる流砂、そして目印が消えてしまうことが運命付けられた場所」(PI p.1563)なのである。またこの飛行機の名前はDawnであって、これはつまり夜明けということで、既に指摘したように、街の広がりや南フランスを志向していた時の案内表示板には「夜明け」と記されていたのである。つまり最初は案内表示板であったものが次には飛行機となって、終いには行方知らずになっているというわけである。この不明確さは我々をして想像の領域へと招き入れるのであるが、手掛かりとなっている島の名前が砂ということから、掴もうとして掴み切れない対象 a となっていることは明らかである。ところでここにおいてブルトンの居場所はどこにあるの

であろうか。「朝の新聞は私に私の消息を知らせるのに常に十分であるだろう。」(PI p.753) としているが、この地点は明確ではないし、ナジャの物語やそれ以後の部分で示されていたパリ市内やアヴィニョン、リヨンといった具体的な地名も記されていない。我々もこのテキストを通してあれやこれや推測する他ないのである。そしてこの過程において我々は気付くことになるのであるが、ブルトンはまさにその推測された言わば幻想の世界に存在することがわかるのである。ブルトンにとってパリ市内の街中はナジャがいた時には輝いて見えたにも拘らず、ナジャがいなくなるとその様相を変化させてしまう。シュザンヌとの楽しい思い出の場所となったアヴィニョンは現実的な問題から立ち去らなければならなかったわけであるし、リyonは現実ではなくブルトン自身の夢の中でこそ希望をもたらし場所となるのである。従ってここに言葉の世界が生じてくるわけであるが、あるものが存在しないがために存在するその空虚な言葉の世界に現実感をもたらしするのは、ブルトン自身の幻想であり現実の代わりとなる心的現実であると言えるだろう。つまり現実を回避し言葉の世界に移行しても、ただ単に言葉だけであれば無味乾燥な記号にすぎないわけで、それが現実の代わりとして満足のいくものとなるためには現実感なるものが必要なのである。とは言っても、明確にこれという形で存在するわけでもなく、ありそうでかつ掴むことができそうでありながら掴み切ることができないという、まさに対象 a の存在が必要なのである。この心的現実というのは、ラプラシユやボンタリスによって書かれた『精神分析用語辞典』¹³に示されているように、単なる内的世界とか精神的領域のことを意味するのではない。何か存在の奥底にある核となるようなもののことであって、それがあるからこそ単なる比喩としてではなく、現実を支え現実感をもたらしすることができるわけである。そしてこれが、ラカンの言う＜現実界＞というもののなのである。さて現実界を現実界たらしめる対象 a とは、ブルトンにとって具体的にいかなるものであったのか。これはテキストの中において随所に示されているオブジェや現象といったものであるだろう。ブルトンは次のように書いているのだ。「純理論的な確認といった種類のものであったとしても、正確には何の信号か言えないとしても、信号としてのあらゆる痕跡をその都度呈して、全く一人の状態において、私がありそうもない共謀を自分の中に発見するという結果になるが、私が一人で船の舵を取っていると思うたびごとに、私の思い違いを認めさせる事実が問題なのである。我々にとって何か重大で本質的なものが依存している非常にはっきりとした感覚を伴って、非常に珍しい物を見たとかこれこれの場所に行ったとかいったことを引き起こす、特別で言い表わせない驚きから、我々の理解力をはるかに越え、ほとんどの場合、我々が自己保存本能に訴える時にしか、熟慮された活動に我々が戻ることを認めないある種の繋がり、ある種の偶然の重なりが我々にもたらす、我々自身との和解の完全なる不在に至るまで、最も単純なものから最も複雑なものまで、これらの事実を階層化しなければならないだろう。」(PI p.652)

つまり我々に何かを感じさせるものであるから、何もないと言い切ることは当然できないのであるが、しかし明確にあることを示すことも困難である何かなのである。確かなのは、その何かに反応するものは自分自身の中に存在するということであり、これによって現実感を伴い現実をも支えることができるわけである。ブルトンにとって示されている対象 a は『ナジャ』

のテキストにおいて様々な形で示されているわけであるが、その最たるものはナジャそのものであるだろう。ナジャがシュルレアリスムの化身であるかどうかに関わらず、ブルトンにもたらしたものがブルトン自身によって作られた幻想にすぎないとしても、それは現実の代わりというよりも、ブルトンにとってはまさに現実そのものということになるだろう。

終章

『ナジャ』の冒頭において「私とは誰か」という問いかけをしたブルトンの自己同一性の探求は成功したのであろうか。ナジャの物語において、「もしそれが詭弁だったとしても、私自身に対して、私自身を出迎えに最も遠くからやって来ている人に対して、常に悲痛なく誰だ、そこにいるのは>という叫びを発することができたのは、少なくともその詭弁のおかげなのである。誰だ、そこにいるのは。あなたなのか、ナジャ。彼岸（下線原文）が、全ての彼岸が現世にあるというのは本当なのか。私はあなたの言うことが聞こえない。誰だ、そこにいるのは。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)と書いているわけであるから、ブルトンにとっての自己同一性の試みは鏡像段階にあるということが言えるだろう。ブルトンがブルトンであるためにはナジャという他者を必要としたわけであるが、それは本当の自分となるためにはナジャを通さなければならず、そしてそれがあたかも成功したかの如く自他の融合ということになれば、果たしてそこにいるのは自分一人なのかどうかかわからないという事態を招くわけである。そしてこれがナジャの物語の結末であって、ナジャの物語以後の部分においては明確に名前として記されていないまでもシュザンヌが登場するわけである。しかしナジャとシュザンヌだけかという、そうではないことが次の箇所から窺える。「故意にそうするのではなく、君は私の予感した様々な顔と同様に、私にとって最も慣れ親しんだ体つきに取って代わった。ナジャはこのような顔に属していたが、君が私から彼女を覆い隠してしまったのは完璧である。／私が知っていることは、この人物の置き換えが君のところで止まるということだけである、何故なら何も君に置き換わり得ないからであるし、私にとってこの謎の連続が終わるはずであったのはるか昔から君の前でだったからである。」(PI pp.751-752)

ここから明らかなことは、シュザンヌを最後の女性として、それまで数々の女性がいたわけであり、その中の一人にナジャがいたということになる。またブルトン自身シュザンヌを最後の女性として捉えていて、当時の心情としては真実であろうが、原理的にそうだと言い切れる根拠はまるでない。従って実際にテキストとして書かれるかどうかという問題は別にしてとりあえず作品となっているものはナジャの物語であるが、これに加えてシュザンヌの物語も可能であるし、全く別の女性の物語も可能であるだろう。そしてそれなりの変化や進展というものもあるだろうが、自己同一性に関して言うならば、鏡像段階における他者の発見と自他の融合ということになるであろう。つまり他者が変わるだけで、構造的には同じでその繰り返しとなるわけである。そしてこのような事態に対してブルトンの心情とはいかなるものであろうか。注目すべきは、ナジャの物語が終わった後の部分でまず示されること、そして1962年の改訂版において付されることになった「序言」の部分においてまず記されていることは、自己同一性

のことではなくて本を書くということについての関心事なのである。「もし既にこの本の途中で、書いたり更にはあらゆる種類の本を出版するという行為が無意味なこと（下線原文）とされているとするなら、作者が何年も後に、その表現形式において多少なりとも改善したいと思う自己満足をどう考えるのか。」(PI p.645)

つまりここで問題として出てくるのは、ブルトンにとって重要なのは自己同一性ということではなくてむしろ書くことの方だったのではないかということである。言い換えるならば、ブルトンにとってまず書くということがあり、その書くことにおいて何を書くかということが問題となり、そこで選ばれたのが自己同一性という主題であったのではないかということである。ここにおいてシュルレアリスムの定義がまさに書くことにあったことを我々は想起すべきである。『シュルレアリスム宣言』において、その定義は次のように書かれている。「シュルレアリスム、男性名詞。口頭であれ、書くことによってであれ、全く別の方法であれ、思考の実質的な活動を表現することを目指す純粋な精神の自動現象。理性によって行使されるあらゆる抑制の欠如の下、審美的もしくは道徳的な全ての関心事の外での思考の書き取り。」(PI p.328)

これはいわゆる自動記述のことであり、『シュルレアリスム宣言』には自動記述のテキストとして『溶ける魚』が付されている。自動記述による作品としては『溶ける魚』だけではないが、およそこの時期に主として用いられた手法であり、それ以後は見当たらない。確かに自動記述は方法としては言わば実験的なものであり、シュルレアリスムを通して使用されたものとは考えられない。しかし書くことについては、ブルトンは終生固執し続けたはずである。ここにおいてブルトンにとって自己同一性の探求は欲望であり続けたわけであるが、書くことはブルトンの欲動として考えられるのではないかと思う。つまり自己同一性について少なくともナジャにおける場合は成功とも失敗とも言いかねる状態であり、ブルトンのナジャへの関与という視点から捉えてみるならば、失敗だったのではないかとする指摘も十分に可能なのである。にも拘らずブルトンが『ナジャ』という小説として書き提示する理由は何かと考えてみるならば、そこにブルトンの書くことへの欲動を見て取ることになるわけである。そしてナジャの後にシュザンヌという女性が現われ、彼女こそが最後でかつ唯一の女性であるとブルトン自身明言しているのであるから、ナジャは自己同一性の探求においても失敗例であったはずなのである。このような経験から、自己同一性を見出すための他者の存在とは現実的にもそして恐らくは原理的にも失敗し続けることを運命付けられた予め不在とされた存在であって、他者とは見つけたと思ってもそれが錯覚であったことを認識し続ける存在なのである。にも拘らず鏡像段階における他者を見出させようとするのはブルトンにとっての欲望であると言えるわけであるが、それを背後で可能にしているものこそ欲動である。ここにおいて欲望と欲動の区別を明確にしておくならば、欲望とは幻想を抱えつつも結局のところ満たされることのないものであるのに対して、欲動とはそれとは関係なしに突き進むものである。ブルトン自身書くことについて「無意味なこと」としているように、世俗的なことは別にして何ら得るものはない行為なのである。つまりそこで問題になるのは、何をいかに書くかということではなく書き続けることなのである。そして書くことにおいて自己同一性の問題を扱うわけであるが、予め失敗するこ

とを運命付けられたこの探求の試みにおいて、目的に達し探求自体が完結することはあり得ないのであるから、逆に言えばそのことによってブルトンが書き続けることが可能となるわけである。しかし一方で自己同一性を求めるブルトンにとって失敗することを予め運命付けられているとはいいいながらも、とりあえずはそれを忘れ、半ば自己欺瞞的ではあるのだが、自分にとっての他者を見出したいという欲望を満たそうとする。これがナジャの物語以後の部分において「君」という代名詞のもとでシュザンヌを登場させ、最後で唯一の女性としてこの探求に終止符を打ちたかったのだ。だからこそ、それ以前の話としてナジャの物語を書くことができたのである。というのも、『ナジャ』はナジャの物語を書き終えることによって完結したのではなく、ナジャの物語以後の部分をつけ加えることによって完成したという事実注目すべきなのである。つまりナジャの物語とナジャの物語以後の部分については、執筆段階において時間的には4か月という隔りがあるわけである。ブルトンにしてみればナジャとの出会いと別れといった出来事は自己同一性を求めるための一つの体験であって、書くことを可能にするものである。しかし考えてみるならば、そこにあるものは予め失敗することを運命付けられた鏡像段階の構造であって、自己同一性を求めるという欲望を持つブルトンにとって、この失敗の繰り返しは原理的に理解できていても、現実的には繰り返すことを何としても避けたいわけである。しかし目の前にあるナジャの物語とは常に繰り返されることが可能な物語であって、ナジャの名前を別の名前にすることが容易なものである。従ってブルトンは書き続けたいと思いつても、それはまたもや失敗することがわかっている物語であり、ブルトンとしても中断を余儀なくされたわけである。そしてその間にブルトンを支えていたものは、必ずや自己同一性を実現する他者を見出せるはずだという希望であって、それはシュザンヌに出会うことによって実現できたのである。既に指摘したように、シュザンヌといえども最後で唯一の女性ということではないはずであるが、当時のブルトンにとっては心情的にそれが真であったため、その時点で言わば安心してナジャの物語以後の部分を書くことができたわけである¹⁴。原理的にはナジャの物語は名前を変えて繰り返し書かれることが可能なのであるが、そのこと自体は自己同一性の探求に失敗し続けていることを意味するので、ブルトンとしては書き続けることができない。従ってその意味では『ナジャ』はそれとして完成されたと言うべきであって、1962年の改訂についても繰り返しということではないのだ。このように書き続けることを求めるブルトンにとって、自己同一性の探求の物語は『ナジャ』をもって最後としたいという気持ちが働くため、原理的には繰り返しが可能であったとしても、最早その形式をとって書き続けることはできない。そこでブルトンが辿り着くのが「心的現実」なのである。確かにナジャの物語が始まる前の挿話群において、「私はついに私自身の体験、私にとって私自身についてほとんど断続的に思いを巡らせ空想に耽っていた主題であるものに達するわけである。」(PI p.653)と書く時、ブルトンにとっては現実において鏡像段階的な他者を探し求めるという欲望に囚われていたわけであり、それを主題にして書き続けるという態勢が確立していたわけである。しかしこのようなあり方は、既に指摘したように、ナジャの物語の繰り返しが原理的に可能ではあってもブルトン自身がそれを忌避することになるわけであり、採用することはできないし、この論考に

において想像界から象徴界更には現実界へと移行する自己同一性の探求の流れとも合致しないのである。心的現実において書き続けるという姿勢は、ブルトンをして夢を対象とした無意識の研究へと向かわせる。無意識についての関心は『シュルレアリスム宣言』においても、そしてこの論考の対象である『ナジャ』においても触れられているが、『ナジャ』の執筆後の1932年において『通底器』というテキストにおいて結実する。その通底器については、更に後に書かれた『シュルレアリスムと絵画』においてブルトン自身によって説明されている。「私が愛する全てのもの、私が考えそして感じる全てのものが、私を内在性に関する一つの特殊な哲学へと導く。それによれば超現実は現実そのものの中に含まれ、現実に対して上位でもまた外部でもないだろう。そしてそれは逆も言えるのであって、何故なら含むものは同時に含まれるものだろうからである。問題となるのは、ほとんど含むものと含まれるものとの間の通底器であるだろう。」(SP p.46)

ここで示されている「内在性に関する一つの特殊な哲学」とは、『シュルレアリスム第二宣言』においても示されているように、例えば夢と現実といった相対立する二項がある至高の一体性、例えば超現実の中に融合させようとするものであって、この論考において辿り着いた心的現実もその意味で理解することが可能であり、超現実もしくはそれに近いものと考えることができるだろう。そしてこのように超現実を捉えるならば、通底器に関する箇所は次のように読むことができるだろう。つまり自分にとって愛するものとは自己同一性に関する鏡像段階で明らかにしたように自他融合の状態にあるわけであり、考えることによって得られる言葉の世界も全ては心的現実に着するわけである。その心的現実とは言わば自分自身の内部にあるわけであるから、この現実にあることは明らかであるが、現実それ自体も心的現実によって捉えられるということを考えるならば、相互的であると言うことも可能である。従って問題となるのは現実と心的現実の間、その繋がりをもどのようにして求めていくかということなのである。その時媒介となるのが対象aである。つまりここにおいて問題になってくるのが、ある種の物体や普通では見過ごしてしまう細部に関することであって、これこそまさにラカンの言う対象aなのである。ブルトンはこれらの物を通してある種幻想に到達するわけであるが、注目すべきは、それが単なる空想や想像の世界というのではなく、現実感を伴っていることである。これについてはブルトン自身『シュルレアリスム宣言』において「幻想的なものにおいて存在する素晴らしいことは、幻想的なものが最早ないということである。つまり現実的なものしかないのである。」(PI p.320)と指摘しているわけだが、これが対象aとなり得るのは、現実に存在するものが我々によって言葉でもって捉えられその意味を付されるのに対して、そのような細部については言葉も与えられず従って意味も付されることがないからである。従ってそれは現実に存在していると同時に存在していないということになるわけであり、我々が言葉でもって何かを捉え表現しようとする時に抜け落ちてしまうものなのである。それは表現しようともそれに該当する言葉が存在しないということであるかもしれない、また敢えて言葉でもって表現しようとしても恐らくは理解されないということを予測しなければならない。『ナジャ』においてナジャの言葉の理解し難さ、そしてナジャの物語の後の部分においてブルトンがナジャの物語を

見直しつつも突如として哲学的であったり詩的であったりして理解することが困難な箇所が現われるが、対象 a をブルトンが敢えて表現しようとした結果であると理解すれば、自己同一性を求めた『ナジャ』の結末として捉えることが可能となるだろう。

注

- 1) 本論考において引用されている文は、全て筆者自身が訳出したものであり、引用文の後の括弧の中に示されている略記号は以下の著作を示している。
(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1988.
Manifeste du surréalisme, 1924, pp.309-346
Nadja, 1928, pp.643-753
Second manifeste du surréalisme, 1930, pp.775-828
(SP) André BRETON, *Le surréalisme et la peinture*, Gallimard, 1965.
(EII) Jacques LACAN, *Écrits II*, points, Édition du Seuil, 1971.
(EN) Jean-Paul SARTRE, *L'être et le néant*, Bibliothèque des idées, Gallimard, 1943.
- 2) 「アンドレ・ブルトンにおける超現実のジャック・ラカンの読解」、『四天王寺国際仏教大学紀要』平成10年度 文学部 第31号
- 3) cf. pp.151-193 Jacques LACAN, *Écrits*, Seuil, 1966.
- 4) cf. PI p.1529
- 5) cf. PI p.1535
- 6) cf. PI p.1532
- 7) cf. PI p.1548
- 8) cf. PI p.1548
- 9) cf. PI p.1551
- 10) 我々はこちらにおいてブルトン自身『ナジャ』において「私の友人のうちで最も身近な人物」と称しているユイスマンスの『さかしま』を想起することができるだろう。『さかしま』の主人公デ・ゼッサントは貴族の館に立て籠もり、現実を嫌悪する生活を続けた。
- 11) cf. PI p.1507
- 12) cf. PI pp.1562-1563
- 13) Jean LAPLANCHE et J.-B. PONTALIS, *Vocabulaire de la psychanalyse*, P.U.F., 1973.
- 14) このような現象は後年ブルトンが『狂気的愛』を執筆する時にも見られるわけであるが、この問題についてはここでは触れないでおこう。